

# 幼稚園にいる 生き物について

高田 和宜

幼稚園には様々な生き物がいる。そして色々な環境の中でどうかこうにか生きていく様である。

飼育される動物となれば、その中で最も苛酷な生活を強いられている生き物であろうと、私は日々痛感しているのである。それは、自分自身が幼稚園という場で眼にしてきた、生き物と幼児が同じ場で生活することによって生まれた事件からであり、「命続く限りの餌付け行為」のことでもある。

しかし、このように手を合わせたい気持ちになりながらも「幼稚園に生き物を」と私は言わして戴きたい。

幼稚園で生かされている動物への懺悔と、幼稚園で生き物との同居をする決意表明として、こっそり告白するものである。

私が学生として、大学の附属幼稚園に出入りし始めたときのことです。幼稚園には池が有りました。

暖かい日ざしの中、子どもが池に足を浸けたのです。「気持ちいい」と。その時足下にメダカが泳い

でいました。「捕まえよう」と思ったのでしよう。メダカを追いはじめました。そのうち他の子が見つけて一人入り、二人入りしているうちに保育者の眼にとまり、池のなかから『立ち退き命令』が下されました。そして側で見ていた私には「鑑賞用の池ですから、入らせないでください」と警告がありました。もう少しで池にはいるところだった私は、義務教育の頃の先生に対する緊張感を、久々に感じたのでした。

あきらめの悪い子というか、どうしてもメダカを捕まえたかったのか、ままたこのザルを持った子どもが立ち入り禁止の池の縁から、メダカをすくい始めました。メダカがザルにかかり、彼は手に取り喜びの笑顔、掴んだまま他の子に見せてたものだからメダカは動かなくなりました。「死んだのう、かわいそうやの」と言って眺めていると、見にきてた子が「水のなかにいれんから死ぬ」。そんな知恵を聞いたものだから、彼はバケツを取りに向かいました。

た。ザルからつまみ上げるときに殺してしまふこともありましたが、とうとう生きたメダカがバケツに入りました。頭をぶつけるようにしてのぞきこんでいるうちに、池は禁漁区になり、メダカの墓が出来ました。私には二度目のイエロー・カードでした。

二度あることは三度あるもので、止めに来た保育者とメダカ漁師のはざまにたった私は「ウサギを抱いてる子は微笑まれて、メダカに触れようとする子は怒られる。生命に対する差別である」とついつい言ってしまう。レッド・カードであった。

大学で教官に絞られ、「学生としての立場を」が耳に残った。私は教官等にきいた。「幼稚園に幼児立ち入り禁止の遊び場が何故必要なのでしょうかと。」

魚捕り放題の池にしろ、と言うのではない。幼児が生活する場に池があり、魚がいる。興味を持った幼児が魚と関わろうとした。ある者は触ろうとし、ある者は共に池で遊ぼうとする。餌を与えようとする

る子もいるだろう。殺してしまうこともある。あるいは、殺されるのを目撃するかもしれない。

これは、当然起り得ることであり、そこに幼児と生き物が生命をぶちかわす生活がある。生き物が身近に居ること、悲しい場面に直面したり、戸惑ったり、感動したり、考えたり、どうしようもなくて保育者に頼ったりするのだろう。

保育の場面では、このような場面を避けてか、水槽に魚を移し、公衆の面前に魚をさらしものにし、餌やり当番までこしらえて、「生き物にしたしみをもたらす環境」という輩もいる。おまけに餌付けて「責任感を……」とまでおっしゃる。池があっても周囲がロープや柵でかこってあり「ここから魚を見ましよう」などという看板に出くわしたりする。

そもそも人間と生き物が共に生活する場は人間にとっても、生き物にとっても付き合いに困難が付き物であろう。わざわざ人間の場に連れてこられたのだから、生き物がより良く生活できるように人間側の

配慮が必然であり、生き物側には少々の我慢をしてもらうことになるだろう。なるべく人間に不自由でないように付き合おうと、生き物をペットにしてしまふ。また、囲いに閉じ込め命尽きるまでの延命行為を行う。

はたして、幼稚園に生き物を持ち込むということは、正しいペットの飼い方を教えるためであろうか。幼児と生き物がいる場で生活し、そこで生まれた様々な事件を通し、違うんじゃないかと思いはじめた。ちょっと過激ではあるが、生かさず殺さずよりも生かして殺す（こともある）、動物との関わり方もあってもいいのではないか。

その後、あの池には、人工の川が着けられ、魚が隠れられる岩が置かれた。魚の生活を脅かすカラスなど（人間を含む）から守るために。生き物を生かすための配慮を保育者がし、子ども達か池を取り戻した。園庭に墓が増えた。捕まえた魚を幼稚園の池

に放すためにもってくる子、池にいた魚を自分で飼おうとして捕まえる子。殺してしまつて、子どもにも責められ泣く子。大人が見ていて矛盾の多い池ではあるが、生き物との関わりは増え、多くの命が子ども目の前を過ぎていった。

縁あって、その幼稚園で一年間働くこととなつた。生き物の事で問題をおこした私が、生き物のこととで悩まされることになる。

カナリアの尻尾がなくなった。幼児は鳥籠のなかの綺麗な生き物を手にしようとした。副園長先生が涙を流しながら、「返して、返さない」と、両手でしっかりと抱え込んでいる子どもから、カナリアを取り返した。彼女が飼っていたカナリアは、尾羽を失った。もう一羽いない。虫籠に入ったカナリアを大事に持ち歩く子がそこにいた。生き物残酷物語の始まりであつた。

幼稚園が春休みのとき、ニワトリとウサギの小屋が改築され、ニワトリとウサギは狭いおりに入れられひしめきあつていた。異臭漂い、狭苦しさもどこの国の住宅事情を彷彿させた。ウサギを放し飼いにしておこうと提案する。始業式の日、わくわく、どきどきの子どもの達の前をウサギがとびはねていた。

ままごとの側でウサギがクローバーを食べているという風景が見られるようになる。ウサギに人参を食べさせると、家から持参する子もいた。人参を持って追いつけても食べて貰えず、ウサギの休んでいるところにはおつて食べるのを見守り、「食べた、食べた」と喜んでいた。まれに、鉢植えのチューリップの花びらを食べるところにでくわす。私が、「自然淘汰」と自分に言い聞かせているのをよそに、「チューリップ、おいしいんかね」などと子どもは言っている。

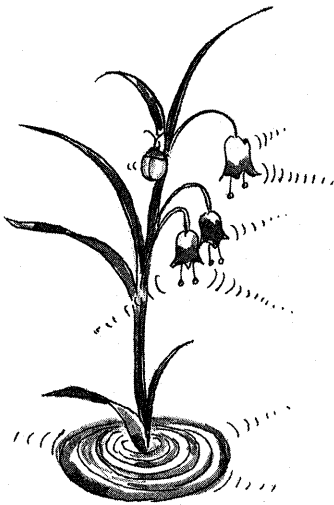
捕まえようと追いつける子どももいた。たまに捕

まるウサギもいた。「かわいそうや、かわいそうや」と言う子どももいて、私もそれに賛同していたが、ある休みあけ、その一羽が食べられていた。幼児に捕まるウサギは外界には出られないのだろう。襲われたショックからであろうか、築山にウサギが穴を掘っていた。倉庫の裏に隠れ、なかなか姿を見せないものもいた。

食べられたウサギの腸を見て、子どもが言った。「先生今度はもっと強い動物にすれば、ライオンとか」彼は自分が食べられるとは思ってないのだろうか。

生き物は糞をする。人間も同じだ。しかしトイレでしない。幼児もたまにそうだ。糞は特に休みあけにテラスの上に落ちてゐる。くさむらに落ちてゐるのは「栄養になる」とあまり気にならないが、コンクリートや人工芝は気になる。「衛生面で…」というので獣医に聞きにいく、「人間がウサギにうつす病気のほうが怖い」と言われる。

ウサギの糞はころころしているので集めやすい。しまつは人間がすればいい。ままごとをしていた子が、「先生あげる」と砂の



ケーキをくれた。「こ、これは」「レーズンケーキ」  
奇麗に糞がちりばめられていました。よく手を洗っ  
て弁当を食べました。

幾度となくウサギは消えていき、あるいは死に、  
今、一羽残っている。時々外に逃げて走り回り、捕  
まったとき小屋にいれられる。この幼稚園にウサギ  
の逃げられる場が足りないようだ。住み良い生き物  
小屋を考えるのをやめ、いっそのこと幼稚園全体を  
大きなおりで囲み緑と生き物と幼児の樂園にしてし  
まおうか。それがいい。異議無しである。

ニワトリが凄かった。まさに血を血で洗う戦いを  
する二羽がいた。幼児の目の前でニワトリがニワト  
リを傷付けている。鶏冠が裂かれ、白い羽に赤い絞  
りがはいっていた。「食べましよう」という意見は  
通らなかつたので、別居生活をさせる。

ウサギを放し飼いにしはじめた時であつたので、  
「ニワトリも」と言うことで、どちらかと言えばお

となしいほうの、別居ニワトリを放す。幼児が追い  
掛けると豪快に飛び上がり、餌を食べているときに  
触ろうものなら、容赦なかつた。悠々と園舎の屋根  
から雄叫びをぶちかましてくれた。

ニワトリの引き取りで（私も含む）がみつきり、  
一番獐猛な別居ニワトリ一羽と、簡単には捕まらな  
いニワトリ数羽は護送された。幼児が安全にニワト  
リとかかわれるようにと。

幼児が安全にとの配慮が裏目に出た。下界に出ず  
餌付けと卵とりで使用されてニワトリは幼児の手に  
よつて下界に出され、あるものは池に浸けられ、あ  
るものは築山からほおり投げられ、砂山に埋もれる  
もの、遊技室の床を滑っていくもの、ロールスロイ  
スの飾りのごとく三輪車のエンブレムとなるものま  
で出てきた。幼児の安全はニワトリの危険となつ  
た。

惨事を目の辺りにして、悲しみの抗議をする子、

ずぶ濡れのニワトリを自分のタオルで拭きながら「一緒に遊びたかったの」ともらす子。頬擦りをしながら持ちあるき弁当まで一緒に食べる子、母親と離れられなかった朝はニワトリ小屋で過ごす子、絶句してしまう保育者、幼稚園は生々しい生活の場になった。

ニワトリが死んだ。心のコントロールがうまく取れず、ニワトリを友とすることで解消していた子が、ぐったりと横になったニワトリの傍らで添い寝している。砂場にいるときも、池で遊ぶときも、弁当のときも彼らは一緒だった。彼の心が壊れるとき、ニワトリは池に投げ込まれ、ある時は宙を舞い、地面にたたきつけられた。

「死んだ。死んでる」と言った子に「眠ってるだけだよ」とげんこつをくらわす。「お前が殺したんだ」彼のげんこつが子どもにむかう。「眠ってるだけだよ」と訴え続ける。冷たくなってきたニワトリを抱いて降園を迎える。放そうとしなかった。

担任と母親が話をしていたとき、彼は私にニワトリを見せてくれた。「冷たくなってきたな。埋めるか」「眠ってるだけだよ」彼の声は力を無くしていた。穴を掘ることを彼に告げる。

スコップを持った私のあとを、ニワトリを抱いてついできた。掘ってる最中、側でじっとして、「先生は力持ちだな」という。私が掘り終えると、彼は抱いていたニワトリをそっと入れた。側で見ていた子が、「餌を食べさせなかったの？」と聞く。「ちがう。死んだんだよ」はっきり答えた。

「僕が埋めるよ」彼は私からスコップを引き取り埋めだした。

そこへ担任と母親がきた。「お墓をつくってあげてるのね。お墓がどこかわかるように、石でも置こうか」担任が言うと、「駄目だよ。出てこれなくなるよ」と彼は言った。

母子は静かに手を合わした。

翌日、子どもが騒いで私を呼びにきた。ニワトリ

の墓が掘り返されているところだった。「どうした  
いんか」「あやまりたいんだよ」彼は掘りながら答  
えた。ニワトリは出ては来なかった。

彼は新しい友達を選んだ。頭の上に乗せて、「こ  
いつはおとなしいよ。いい子、いい子」と言った。

九月に他の子がニワトリを泳がそうとして、溺死  
させた。前にニワトリを埋めた彼は死んだニワトリ  
を見ておおざめ、保健室でよこになっていた。

ある母親から話があった。「昨日娘が帰ってか  
ら、『ニワトリが死んだよ』と、あまりにことなげ  
に言ったのです。カナリアがおっぱを抜かれたとき  
は涙ながらに話していたのですが……。この子が生き  
物の命を大事に思わなくなると思い、父親とこ  
んこんと言ってきかせました」

お母さんの心配もわかります。しかし、彼女自身  
が感じとっているものを信じたものです。夕食で  
空揚げを食べながら、お母さんは涙をこぼしたの  
でしょうか。

幼稚園にいる生き物はしばしば「生き物に親しみ  
を持ち……」「責任感を……」などと大義名分の道具と  
されるが、とんでもない生命への侮辱である。もっ  
とピュアにナチュラルに感じてみよう、蝶に見惚れ  
るように。生き物が側で生活していることがそれ自  
体すばらしいのであり、子どもがそれぞれ自分なり  
のやり方で学んでいくのを見届けよう。管理統制に  
よって生きることには毒された者が、生き物、幼児の  
自然性を犯してはならないのだ。彼らを解放せよ。

(山口大学教育学部附属幼稚園)